

第4期宇治市生涯学習審議会 第7回審議会

会議名	第4期宇治市生涯学習審議会 第7回審議会
日時	平成22年6月24日（木）午後1時30分から3時
場所	宇治市生涯学習センター 1階 第2ホール
出席者	<p>（委員）</p> <p>森川 知史 委員長、奥西 隆三 委員、門脇 洋子 委員、迫 きよみ 委員、向山 ひろ子 委員、弓指 義弘 委員、坂田 耕作 委員、清水 桂子 委員、原 保彦 委員、古川 彩 委員、俣野 良子 委員、六嶋 由美子 委員</p>
	<p>（事務局）</p> <p>澤畑 信広 教育部次長兼生涯学習センター所長、山花 啓伸 教育改革推進室長、安達 昌子 生涯学習課主幹、久泉 昭人 生涯学習課主幹、原 常能 生涯学習課生涯スポーツ係長、上野 映子 生涯学習課生涯学習係長、谷 泰明 生涯学習課事業係長、森 敦子 生涯学習課主査、佐野 雅俊 生涯学習課主事</p>
	<p>（傍聴者）</p> <p>なし</p>
<p>・ 前回の会議録について、委員からの意見が特になかったため、公開することとなった。</p> <p>開会のあいさつ （委員長） 教員免許講習として、「教員のためのコミュニケーション能力」の講座を開くこととなったが、応募が300人になったところで締め切った。それほど、多くの方がコミュニケーションというものに対して切実な問題として捉えてきている。</p> <p>（1）報告事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 平成22年度山城地方社会教育委員連絡協議会総会について ・ 平成22年度京都府社会教育委員連絡協議会総会・シンポジウムについて ＜出席された委員から報告＞ <p>（委員） 社会教育委員として、シンポジストの方々のように子ども達と関わっ</p>	

第4期宇治市生涯学習審議会 第7回審議会

ていきたい。また、子どもをサポートする際には、しっかりと子ども達に社会のルールを教えていかなければならない。

(委員)

シンポジウムは素晴らしかった。しかし、もう少し色々な方から声を聞くことができるような活発な議論をしてほしかった。

(委員)

自分が好きなことを自分のためにやっていて、世のため人のためにされている他の委員の方に対して居心地が悪かったが、そのままでもいいのだ、という気持ちをもつことができてうれしかった。感謝している。

(2) 協議事項

- ・コミュニケーションについて

(委員長)

本日は、アンケートについて思いつかれたものをありのまま言っていたきたい。

(委員)

体育振興会、体育指導委員、体育協会、行政の4つの団体でコミュニケーションを図るため、3年前から懇親会を開くようになった。これをきっかけとして、担当以外でも声をかけてくれるようになり、様々な人とコミュニケーションをとるようになった。

(委員長)

スポーツにおけるコミュニケーションは、他と違う気がする。スポーツというのは人とのつながりが深い気がする。

(委員)

ある市では、文化面とスポーツ面との交流の機会がほとんどない。文化面から歩み寄ることが多いが、スポーツ面から歩み寄ることは少ない、とあるシンポジストがおっしゃっていたが、宇治市ではどうか？

(委員)

市民総体などでは、入場行進やセレモニーの際に音楽団体として参加し、協力されている方々とふれあっている。交流はある。

(委員長)

これは、ある種面白い。スポーツの団体については団体の中でのつながりは深いが、外に対しては薄い、というイメージがある。一方、音楽というのは考えてみると文化であるが、ある種団体競技であるので、コミュニケーションをとりやすい。

(委員)

利害関係が伴うとコミュニケーションは難しい。糸口すら見つけにくい。どうあるべきかを考えることができれば、もう少しうまくいくので

第4期宇治市生涯学習審議会 第7回審議会

はないか？お互いが歩み寄ることが大事である。

(委員長)

何か問題を抱えて、それを乗り越えていくことができるような建設的な議論ができる場があるか？そういう側面を問うことができるようにしなければならない。

(委員)

コミュニティー推進協議会（以下コミセン）に関してはすべてがアテ職である。

コミュニケーションに関しては、うまくいっているようでいていない。10年以上されている人の中には会ったこともない人がいる。コミセンの考え方のコンセプトをしっかりと理解していないから、うまく機能しないのではないか。

問題意識に対して、コミセンへのニーズとコミセンの実態とのギャップがある。

(委員長)

他に何かこういう項目があったらよいと思うものはあるか？

(委員)

アテ職はうまくいかなかったら1年で交代できる。反対に、気の合う人の場合も1年で交代してしまう場合もある。

(委員)

宇治市内は1年交代で代わる役職が多い。この役職を経験した人をターゲットにしてアンケートをとるとおもしろいかもしれない。

(委員)

あなたは人とのコミュニケーションは好きですか？をはじめ、20項目アンケートを考えて、ねらいを3つに絞った。

1. コミュニケーションの観点
2. モチベーションを維持するためにしていることは？
3. どのような人材育成の方法をとっているか？

(委員)

(話と逆行してしまうかもしれないが) コミュニケーションがうまくとれない人はどうしたらよいか？(マツダの事件を踏まえて)

孤立してしまった人が増加すると世の中が大変になってしまう。

(委員)

「だれでもよかった事件」が最近多すぎる。昔は世間的に無理だったが今は本当に孤立できる環境・世の中ができてしまった。逆に、海外では1人にしてくれない。

(委員)

10代の少年の事件(足におもりをつけて少年が亡くなった事件)に関しては、厳しい上下関係の状況にいない限りならぬ環境の中で亡くなってしまった。ある意味孤立より恐ろしい状況かもしれない。逆に1人でいた方が安全だと思う見方もある。

(委員)

こういった事件を起こす子ども(上記の事件)は、こうしたらこうなるといふ予測ができない。

(委員)

意思能力がなくなっている。ある瞬間までは病気だが、それを超えてしまうと意思能力がなくなってしまうのである。

(委員)

その子がコミュニケーションを取れる取れないということではなく、大人が何も教えなかったから事件が起こったのかもしれない。本当にかわいそうだ。

(委員)

今はおんぶではなく、だっこをしている母親が多い。おんぶをするのは家の中にいるときくらいである。なぜなら、おんぶしていると、不審者によって後ろから刺される危険性があるからである。

そんな世の中に対して不信感をもった母親は、自分が子どもを守らなくてはならないと思ひ、その結果様々なところに対して守りに入ってしまう。そのような母親の中には、近所の方ではなくインターネットを通じて相談などを行っている方もいる。

(委員)

コミュニケーションを凶ろうと思ひのは、相手を信頼した上でできるものである。親が外に対して不信感をもっているのに、子どもが信頼感をもつはずがない。つまり、そのような環境で子どもが育ってもコミュニケーション力は育たない。

(委員長)

地域が変わっていく中で、周りがどこの誰か分からない世の中になっている。逆に、不審者に対しては切り捨てている。本来は、そうなる前に人や地域がその人間をまともに育てていかなければならない。結局は、このような人を怖がっている人間が遠ざけているので、自分で自分を危険にさらしているのではないか。

ある本には、「コミュニケーションに関しては、体がベースである。」と、書かれている。今のコミュニケーションの問題は体が変になっているから起きている。言葉を発するのは体であり、その言葉を発する人

第4期宇治市生涯学習審議会 第7回審議会

全体の雰囲気を感じとって全体を伝えることを今の人はできない。

(委員)

意思疎通で大切なことは、言葉7%、声の調子38%、態度55%で占められていることである。

(委員長)

コミュニケーションというのはほとんどが聴く力である。聴く力とは極端な話であるが、話が出てこない人を目の前にした時にどれだけ待つことができるか、ということである。

傾聴というのは、言葉・声を聞くのではなく、体のありようを聴くことである。

(委員)

今の中学生の中には、メールで喧嘩している子がいる。言葉は7%しか伝わらないので仕方がないのだろうか。

(委員長)

文字だけだと、喧嘩していても腹の虫が治まらない。

今は、インターネットを通しての誹謗・中傷が頻繁化している。

(委員)

やはり、面と向かって話をしなければならぬ。顔を合わさないことで、事態が深刻化するのである。逆に、顔を合わすと治まる場合が多い。

(委員長)

私は、行き違いやトラブルがおこらないように、メールでやりとりする場合は、自分が受け取ったところで終わらず一文添えるようにしている。

(委員)

私は、メール・電話・手紙などではコミュニケーションはとれないと思う。短い文では伝わらない。それよりもスキンシップをとったり食事に行ったりなど、直接人と会う機会をつくった方がよりよい人間関係を築くことができると思う。

(委員長)

コミュニケーションには、言葉という情報伝達と表情などの情を伝えるものという2つの意味がある。これらの2つの意味を切り離していかなければならないだろう。

※お持ちいただいたアンケートの資料については委員長に提出。

(3) その他

- ・小中一貫校について
(山花室長)
 - ・平成24年4月より全学校で実施
 - ・小中一貫校と小中一貫教育校について
小中一貫校は一つの敷地内、同じ校舎の中に小学校と中学校があり、小中一貫教育校は、敷地は離れているが内容を一体的に実施しているものである。
 - ・義務教育9年間を系統的・継続的に実施
前期(小学校1年生～4年生)・中期(小学校5年生～中学校1年生)・後期(中学校2年生・3年生)の3つのまとまりに分け、きめ細かい指導を実施する。
 - ・業者の入札が決定
来月(7月)より工事に取りかかる予定。総額35億1645万円。大久保小学校の工事では20億円かかったが、中学校も含めるので大体この値段くらいにはなるだろう。
 - ・コンセプトは「きずな」
小学校・中学校のきずな、小学校・中学校の教員同士のきずな、学校・地域・家庭のきずな、など様々な「きずな」を大切にしていきたい。
 - ・学校の特色について
 - ① 前期・中期・後期の教室配置
学年の離れた子ども達の教室が同じフロアにあることで、積極的に異学年交流を図ることができる。
 - ② 特別支援学級の配置
環境の変化に敏感な、障害のある子ども達こそ焦点を当てるべき。
 - ③ 教師ステーション(第2職員室)
休み時間や放課後などに教師が自分の教室に入るのではなく、教師ステーションに居ることで、他の学年の子ども達に目配せすることができ、教師がいつでも子どもに対応することができる。

- ・近畿大会について <平成22年9月3日(金)>
- ・全日本中学ボーリング大会について<平成22年7月22日(木)>
- ・夏休み子どもフェアについて <平成22年7月27、28日(火、水)>

(事務局)

別紙資料のとおり予定されているので、参加していただきたい。

<次回の会議について>

平成22年8月24日(火)午後1時30分から
場所：生涯学習センター 2階 一般研修室